

氏名	平井 彩可			
ヨミガナ	ヒライ アヤカ			
学位の種類	博士（学術）			
学位記番号	博美第678号			
学位授与年月日	令和4年3月25日			
学位論文等題目	（論文） サンドロ・ボッティチェッリ後期作品研究			
論文等審査委員				
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川 倫明
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺 幹之助
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤 直樹
（副査）	茨城大学	教授		甲斐 教行

（論文内容の要旨）

本研究は、イタリア・ルネサンスを代表する芸術家サンドロ・ボッティチェッリ（1444/45-1510）の後期に位置づけられる1490年代以降の作品二十点余りのうち、特に宗教色の強い作品を各章ごとに取り上げ、複雑で精神性の高い後期作品を紐解くとともに、その表現に関する検証を行うための研究である。ボッティチェッリの後期は、当時フィレンツェを席捲したドメニコ会修道士ジローラモ・サヴォナローラ（1452-1498）との関係から「サヴォナローラ的神秘主義様式」とみなされ、また、画家としての衰退期として、その華やかで優美な前半期に比べ、妥当な評価を受けずにきたように思われる。ジョルジョ・ヴァザーリの16世紀の伝記や、1900年代初頭の研究史が固めた「ピアニョーネ（サヴォナローラの熱狂的支持者を当時そう呼んだ）画家ボッティチェッリ像」が、長く研究史に影を落としてきたのである。しかしながら後期の宗教作品には、それまでの図像伝統にも見られず、サヴォナローラとの関連においても解釈されない特異なモチーフや表現がしばしば見られ、それが作品の大きな特徴となっていることが多い。執筆者はこれまで十分に研究されてこなかったこれらのモチーフのいくつかを、ボッティチェッリが手掛けた「ダンテ『神曲』挿絵」と類似していることに着目し、後期の宗教作品と『『神曲』挿絵』を結び付けることを試みた。

第I章では研究の前提として、ボッティチェッリの後期にあたる1490年代以降の、聖年1500年前後における不安定で混沌としたフィレンツェの状況や、当時のフィレンツェにあった文化的・宗教的環境を整理し、芸術家が立っていた土壌を理解することを目的とした。特に、中世以来重要な宗教的テーマであった死後世界の概念や終末論的思想に着目し、また、中世における知覚・認識など、その文化的・心的伝統をまとめた。また、サヴォナローラの活動とその思潮、市民の反応なども概観した。

第II章ではボッティチェッリの二点の《キリスト哀悼》と「ダンテ『神曲』挿絵」を取り上げた。《キリスト哀悼》は、メディチ家とサヴォナローラ両方の影響がみられる時期にあたる1490年代前半の作例である。抑制された中にも明確な感情表現があるが、当時北方からもたらされた血や涙といった直接的な外面描写によってではなく、人物の仕草やポーズ、あるいは身体的接触によって表現されており、より精神性が高まっていく過渡期におけるボッティチェッリの表現上の選択が見てとれる。

「ダンテ『神曲』挿絵」はボッティチェッリが長期間を費やしたことで知られ、芸術家の個人的な関心を知る上でも、様式の変遷を見る上でも重要な作品である。ボッティチェッリに関わる2点の『『神曲』挿絵』の関係性を整理し、ボッティチェッリの『神曲』に対する関心と情熱がメディチ家との関わりのなかから生まれたことを確認した。また、全92葉からなる挿絵素描群に含まれるモチーフは、独立した絵画作品のなかにも度々借用されている。ボッティチェッリは『神曲』註解者としての自負から全歌章を視覚化することを意図したが、この前例のないプロジェクトとテキストに対する深い思索を通じて、ボッティチェッリが豊かな感情表現と内面描写のヴァリエーションを獲得したと定義するに至った。

第III章では《神秘の降誕》を中心作品とした。サヴォナローラとの関係性の有無が研究史における論点となってきたのであるが、この論点では解決されない特異なモチーフ「天使と人間の抱擁」や「黄金の天のドームと天使の輪」によって、画面は単なる降誕図にとどまらない特殊な構成となっている。本章では特に「天使と人間の抱擁」に着目し、この行為が示す意味を考察の対象とした。ボッティチェッリは、これに類似する抱擁を『神曲』「煉獄篇」の挿絵において描いており、それは「ゆるしの秘跡を経て神と和解するプロセス」を示すものであった。フラ・アンジェリコの《最後の審判》などの前例に描かれた「地上の楽園」でも、この天使と人間の抱擁が象徴的にあらわされ、それらは浄罪の完了の証明と解釈されるものである。《神秘の降誕》の天使と人間の抱擁は、「煉獄篇」挿絵に描かれた抱擁との形態的類似から、「悔悛による罪の浄化を経た人間と神との和解」を意味すると考えられる。この図像が組み込まれることによって、降誕図は、「悔い改め」や「神との和解」という終末論的性質を色濃く含む特殊な降誕図となっていると結論付けた。これらはサヴォナローラが強調した概念でもあり、サヴォナローラの処刑の2年後に描かれた本作品は、彼によって高められた終末論的雰囲気、彼をきっかけに市民が共有することとなった将来へのヴィジョンを強く喚起するものであった。

第IV章ではパラヴィチーニ・コレクションの《キリストの変容》を扱い、この作品が当時重要視された礼拝行為に関わるものと解釈した。本作品は、中央パネルに「キリストの変容」、両翼パネルに「書斎のヒエロニムス」と「書斎のアウグスティヌス」を伴うというめずらしい構成である。中央パネルのエリヤが預言者ヨハネのような隠遁者像として描かれているのも特異な点である。これらを考察する上で執筆者は、アウグスティヌスがヒエロニムスをみた「幻視」に着目した。すなわち、本来目に見えない神聖なものを「見る」という行為である。「見る」行為は「肉体的」「想像的」「知的」という高度化していく三段階に分けられ、特にルネサンス期には、肉体と精神、感覚と知性の間にある、心的ヴィジョンとしての「ファンタジア（想像）」が礼拝行為として重要視された。本作品における三人の弟子たち、ヒエロニムスとアウグスティヌス、エリヤとモーセのそれぞれがあらわす三様の「見る」は、「肉体的」「想像的」「知的」という、高度化していく認識の三段階と一致している。すなわち、異なる立場・次元からの「見る」を描き分けることによって、パラヴィチーニの三連画が、「ファンタジア（想像）」をとおり「外的認識」から「内的認識」に至る過程をあらわす可能性を指摘した。個人的な祈念図と考えられる本作品には、観者をより高度な瞑想に促す意図が込められていると言えよう。

第V章では《神秘の磔刑》を検討の対象とした。宗教色を帯びる後期作品のなかでも、サヴォナローラとの結びつきがひととき強いとされる一点である。先行研究では、サヴォナローラの説教や幻視などテキストと本作品との間に一致が見出されてきたが、本研究ではサヴォナローラの熱狂的な追従者ドメニコ・ベニヴィエーニの著作に付された挿絵との比較によって図像的一致を明らかにし、サヴォナローラとの関連をより強固なものとした。本作品はサヴォナローラの幻視を描いている一方、幻視とは関係せず、かつ図像的関連もないモチーフも含まれる。たとえば獣を打ち据える天使や画面上部の金環は、ダンテ『神曲』で強調される「罪の浄化」や「悔悛による魂の上昇」と強く共鳴している。ボッティチェッリの『神曲』挿絵ではこれらの概念がダンテとベアトリーチェの姿であらわされていたが、《神秘の磔刑》ではマグダラのマリアと天使に当てはめられている。両者の形態的類似は、ある概念を示すうえで形態の一致にとどまらず意味上でも強く結びついていることを示している。ダンテ『神曲』の文脈を重ねることで、単にサヴォナローラの幻視を図示するのではなく、サヴォナローラの死後に画家自身のなかで高まっていった浄化や救済に対する強い熱望が重ねられている可能性を提示した。

以上より、『神曲』の感情的インパクトは、表現のレパートリーとしてサヴォナローラの死後にも適応されていることが確認された。降誕や磔刑などの伝統的な宗教主題に『神曲』図像を借りて同時代の様相を入れ込むことで、作品に1500年前後のフィレンツェを重ね、自身の宗教観を入れ込み、ボッティチェッリの後期における深遠な表現は形成されたと考えられる。本研究をとおり、ダンテ『神曲』とボッティチェッリの後期宗教作品が相関性を持つこと、メディチ時代の人文主義的環境で形成された絵画表現の可能性が、きわめてサヴォナローラ的な作品の中でも十分に生かされていることが、確認された。本研究は、ボッティチェッリの画業に与えられてきた「華やかで世俗的な前半期」とそれに比べ「単に低迷し衰退した後期」という、単純な認識を覆す一助ともなるものである。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、イタリア・ルネサンスの画家サンドロ・ボッティチェッリ（1444/45—1510年）の後期の作品群から、いくつかの代表的な宗教主題作品を取り上げ、独自の視点から論じたものである。ボッティチェッリは一般に優美で抒情的な神話主題の作品で知られるが、1490年代以降、フィレンツェで大きな影響力をもった宗教指導者ジローラモ・サヴォナローラ（1452—98年）の厳格な教えの影響下に、その絵画様式からは次第にかつての世俗的優美さが失われていき、晩年にかけてある種の芸術的衰退を示したととらえられることが多い。筆者はこうした後期の作品群にあらためて注目し、そこに見られる宗教的構想を詳細に分析するとともに、サヴォナローラ思想との関係性を問い直すことを試みた。

筆者のアプローチの特徴的な点は、ボッティチェッリが1480年代から関わったと思われるダンテ『神曲』の挿絵制作に注目したことである。ヴァチカン図書館とベルリン版画素描館に現存する挿絵素描を詳細に観察するとともに、それらの表現を『神曲』のテキストとあわせて考察することで、挿絵に見られる特徴的な人物ポーズが、しばしば絵画に転用されるとともに、それがキリスト教の教義上重要な概念に呼応していることを筆者は看取した。これらの挿絵の表現を、タブローとして制作された宗教主題の絵画の分析に用いることで、そうした宗教画にこれまで認識されることのなかった意味の側面を説得力をもって指摘することに成功している。

論文は全5章から構成され、第一章では、先行研究においてボッティチェッリ後期の絵画様式とサヴォナローラ思想との関連が、これまでどのように評価されてきたかを批判的に概観した。また、サヴォナローラ時代およびその前後のフィレンツェにおける文化的・宗教的・政治的環境について、特にサヴォナローラの改革思想が熱狂的に受け入れられた背景や、サヴォナローラが視覚芸術に対して抱いていた考えなどをまとめ、第二章以降の考察の前提とした。

第二章では、1490年代前半に位置づけられる2点の《キリスト哀悼》（ミュンヘン、アルテ・ピナコテークおよびミラノ、ポルディ・ペッツォーリ美術館）について論じている。これらの作品は、強い情緒性もちながらも、必ずしもそこにサヴォナローラ思想の影響を読み取ることはできない。筆者の独自の主張は、ミュンヘン作品の死せるキリスト像の海老ぞりになったような特徴的な姿勢が、かつてローマにあった古代石棺浮彫に由来することを指摘し、さらに同じ姿勢が『神曲』挿絵の地獄篇33歌の挿絵のなかで、責め苦にあえぐ墮地獄者の姿として利用されていることを明示した点である。ここではまだ、ポーズの共通性が必ずしも意味の転移をとまなっているとはいえないが、『神曲』挿絵との比較は第三章以降の筆者の分析のための前提となっている。

第三章では、現在ロンドンのナショナル・ギャラリーに所蔵される有名な《神秘の降誕》が分析される。この作品は、通常の「キリスト降誕」ないし「羊飼いの礼拝」の図像に、多くの異例なモチーフが付け加えられており、とりわけ上部の銘文によって明らかな終末論的メッセージが示されている。本作品はサヴォナローラ思想との内的結びつきについて、過去の研究者たちの見解が分かれてきた例であるが、筆者は独自の視点として、前景に描かれた三組の天使と人間の抱擁に注目し、このモチーフが悔悛による神との和解を表示していることを説得的に論証した。その主要な根拠は、『神曲』挿絵の煉獄篇12歌において、ボッティチェッリがまったく同じポーズを用いて悔悛するダンテの姿を描いていることである。このモチーフによって、同作品にはフィレンツェ市民の悔悛と救済というサヴォナローラ的メッセージがこめられていると考えられる。

第四章では、現在ローマのパラヴィチーニ＝ロスピリオージ・コレクションに所蔵される小型の三連祭壇画《キリストの変容、聖ヒエロニムス、聖アウグスティヌス》について、宗教思想的観点からの分析を行なった。筆者は特に中央の変容の場面向けられた両側の聖人の視線に注目し、本来目には見えない神的事象を認識する「内的視覚」を暗示する表現として解釈した。この章は直接的にはサヴォナローラ思想と関わるものではないが、ボッティチェッリ後期における宗教的認識の深化を物語る作例として位置づけられる。

最後の第五章では、保存状態の悪い小品ながら、その特異な図像によって有名なハーヴァード美術館（マサチューセッツ州ケンブリッジ）の《神秘の磔刑》が論じられる。この作品は、地上の存在を破滅させる神の激しい怒りの表現を伴う点で、最もサヴォナローラ思想の反映が明らかな作例だが、筆者はここでも独自の観点として、この作品の十字架の下部にすがるマグダラのマリアの姿形を、『神曲』挿絵の天国篇22歌に登場するダンテの姿形と比較することで、十字架／天上への梯子にすがることによる救済の希求を意味する表現として解釈した。

以上のように本論文は、これまで多くの著名な研究者が論じてきた画家ボッティチェッリをテーマとしながら、概して絵画的魅力の後退期とみなされがちだった後期の宗教作品をとりあげ、『神曲』挿絵の表現と巧みに関連付けることを通じて、この画家によるパセティックな宗教感情の表出に新たな視点からの解釈を提出した成果として高く評価することができる。筆者が扱った作品の多くは1498年にサヴォナローラが処刑され、その政治的影響力が失われたのちに描かれており、ボッティチェッリによるサヴォナローラ思想への共鳴は、むしろ後者の没後に高まっていった事実をあらためて示した点でも重要である。論述の細部に目を向ければ、いまだ考察のやや不十分な個所や修正が望まれる箇所が散見することは否めないものの、全体としてボッティチェッリ研究へのオリジナルかつ有意義な貢献とみなすことができ、博士学位授与に十分に値する成果といえることができる。